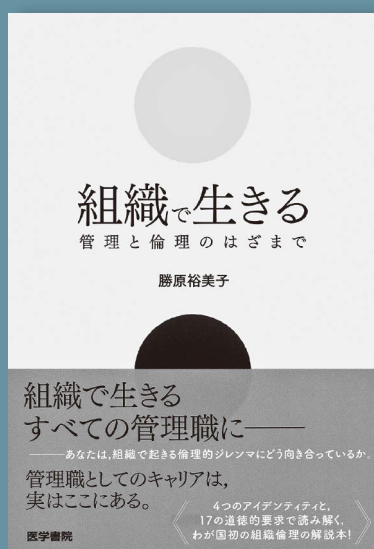


書評

組織で生きる
管理と倫理のはざままで

- 著 勝原裕美子
- 定価 本体 2700 円＋税
- 発行 医学書院

評者

日本看護協会 会長
福井トシ子倫理的意思決定プロセスを
ふに落ちるようにナビゲート

本書は、看護管理者がそれぞれの立場で、例えば看護部長でも看護師長でもその役割について、あらためて熟考することが求められる書です。看護管理者が組織内で担うべき役割について、そしてリーダーとしてどのような行動指針を持つべきか、行動するために選択する、つまり決めるという意思決定プロセスについて、その構造も含めて、読者に問いかけ、ふに落ちるようにナビゲートしてくれます。

看護管理行動 1 つひとつに
関与している倫理への気づき

本書ではまた、多数の看護管理者の管理場面事例を用いて、看護管理行動と倫理について解説されています。役割や行動、行為の選択の 1 つひとつに、倫理が関与していることの気づきを与えてくれます。著者は、「いくら卓越した技能や知識をもっていたとしても、そこに倫理性が伴わなければ、よい仕事とはいえない」(p.9) と先達の研究を紹介しながら、“よい仕事と倫理の関係”、また“よりよく生きること”“よりよく生きたいということ”について問いかけます。そして、よりよく生きるとはどういうことを指すのか、よい仕事とはどのような状況下にあるのか、看護管理者に投げかけてくるのです。

“組織のはざまにいる看護管理者”へ、組織で生きるということと、看護管理を担うということを、よりよく生きていますか？ よい仕事をしていますか？ と問いかけています。この問いに私たちは、どのように答えたらよいでしょうか。その解は、第 11 章「倫理的問題をくぐって形成されるキャリア」から、よりよく生きるためのヒントとして得ることができるように思います。

選択し決定したことは、
内省を通して経験に

事例として登場する多数の看護管理者の語りは、選択すること、決めること、つまり意思決定することの困難さと責任について、振り返ることの意味を教えてください。意思決定した後に、つまり「選択した」「決めた」後にどうするか、そのままでよりよく仕事をしたことにはならない、内省を経て経験にしなければならぬと説きます。次の倫理課題への向き合い方を説きつつ、内省することの必要性に著者は気付かせてくれます。自分自身の行動や行為、言語に対する覚悟を持たせられると言ってもよいのかもかもしれません。

第 12 章「管理者の倫理的意思決定プロセスモデル」を用いた事例検討は、内省して経験に昇華するための“道しるべ”になることは間違いないでしょう。ここで示された枠組みによって、看護管理者として意思決定したプロセスが整理しやすくなります。漠然としていたことも明確になってくることが実感できると思います。プロセス重視という考え方も、倫理を整理して筋道を立てるという点から大いに役立つのではないのでしょうか。

今後も著者が、この組織と倫理の研究を続けてくださるのならば、二重権限構造に潜む倫理課題に取り組んでほしいと思いました。看護管理者のみならず、病院という組織に潜む権限構造のはざままで、ジレンマとともによりよく仕事をしようとはがんばっている第一線の看護職が多数にのぼるからです。

本書でも、“やらまい勝ちゃん”（著者が前職で綴っていた大人気ブログのタイトル）が、看護管理者にたくさんの勇気をくれます。